
夏草

影井 光

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏草

【Nコード】

N3265B

【作者名】

影井 光

【あらすじ】

自己尊厳型の父と、その血の根元祖母。父と父と“私”は、祖母に頼まれ草刈に行く。

エノコログサに似た葉茎の群れに、混じるススキの若株、半々。丈の低いもの高いもの、伐採にころよいもの。

密集し絡めた根の想像つかぬ程に田へ蔓延る草を刈ろうと言い出したのは祖母だった。

ハメの巢になられては、と、前々より近隣の苦情を耳にして（作稲を休み草が茂り）二年目。

愈々痺れを切らせた祖母直々の電通が続き、漸く父が重い腰を上げた。

独りではやらぬと言って聞かない父が動くには、当然、私の参加は必須条件。

母は腰が慢性的に悪く、弟は性格柄、手伝ってやろうと遂に言わなかった。

父と私は、一日かけて、田と言う田、畑と言う畑を刈って回る事になる。

今日は夕立が降る予報が出ていた。

丁度四時を過ぎた頃だっただろうか。

やや空が黄色めいていた。

元より油漏れの酷い私の草刈機が音を上げて静まったのはこの時。エンジンが熱しすぎた。

引いても引いても『ブルル』一言くたばり、諦めて手放し、その時に空を見たのだ。

朝から一度も休む事の無かった腕は今だ小刻に震えて感触が残る。

滴るばかりの頬汗をガソリンの染みた袖で拭いて間無し、予報通り夕立が来た。

汗と油、草の汁でズブ濡れと何等変わり無く、寧ろひんやりと心地良かった。

父はまだ働いている。

肩より湯気を立ち上げて骨皮質の背が鼠色の作業着越しに。

やがて雨が霧を吹いた様になり、雲の割れ目から朱い光線が束となって落ち。

『しいい』と、草木に降り注ぐ音は最早背景、父が刈る音のみが音としてあつたようだ。

油を足し、夕立のお陰で息を吹き替えた草刈機を手にすれば、父にしてはまばらに処理された草の様子が有った。

腰未満膝未満、しかし足首より高く柔さにも過ぎない。

一度歯が通れば折れる夏草のみが残されていた。

雨で湿るにしろ、一振り、二振り、三振り四振りも軽い。

通りであるがなかるうが、私から声を掛けずに今に至る。

雨止めど、父はまだ黙々としていたからだ。

>了<

(ハメ マムシのじと)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3265b/>

夏草

2011年10月3日17時30分発行